

Title	科学と社会事業
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.10 (1932. 10) ,p.2133(627)- 2157(651)
JaLC DOI	10.14991/001.19321001-0627
Abstract	
Notes	慶應義塾創立七十五年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321001-0627

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るその成立に外ならぬ」と説かれた事物の歴史性は、發展段階説によつて、それぞれの段階に於ける具體的歴史的特殊性が明かにされて、完全に把握されるのである。彼の云ふ人間は、吾々に於いては社會的人間として解せられなければならない。そして彼の説くところの、人間の惡徳を嚮導する神の攝理とは、まさに生産様式であつたのである。かく置き換へられて、初めて吾々の學問の本來の課題は明かにされる。そこには最早、回顧的なる、或は觀想的なる態度は、顧みらるべき價値を全く喪失しつくしてゐるのである。吾々が發展段階説の構造を吟味するに當つて、このことは、根本的に把握され理解されてゐなければならないであらう。發展を知らざる發展段階説、それが從來のそれ等であつたのである。

科學と社會事業

小 島 榮 次

一 科學と社會事業

社會事業が今日の米國に於いて一自由職業として認められつゝあることは、本誌九月號所載の拙稿「米國社會事業概観」に述べた所である。職業的社會事業は諸科學の成果を社會事業問題の診斷及び取扱に適用しようとするものであつて、素人の特志家に依つて行はれた舊來の慈善事業又は博愛事業と全く異なる。職業的社會事業家は醫師・辯護士等に似た特殊の専門技術家として、依頼者の爲めにその知識と技能とを役立てるのである。故に科學と社會事業とが極めて密接な關係を有して來ることは明かである。就中應用社會學の如きは、犯罪・感情性犯罪・囚人取扱法・家庭破壊・文化的並びに人種的等の社會的諸衝突・貧困・兒童問題・公衆娯樂・公衆保健・身體及び精神衛生・等、社會事業が取扱ふと同じ對象に就いて研究を行ふが爲めに、從來社會事業知識は應用社會學と稱せらるゝことがあるが、社會事業知識は本來技術であつて科學ではない。技術は多數諸科學の成果を實踐に利用するものであり、科學と異なつた任務・動機づけ・目的・を有する。「技術はその取扱ふ諸材料に作爲しそれらを統制し變化せしめるが、科學は單にそれらを理解しようとするのみである。技術は個別化し科學は普遍化する。右に彫刻すると人間行動を變化せしむるとを問はず、技術はその具象的體現に生きる。科學は具象的世界から放射するとそれが發

見する所の抽象的關係に生きる。兩者は各自その遂行すべき固有の仕事を有し、一が他を必要とすると同時に又、
 5づれも他方の仕事を遂行することは決して出来ない。」(R. M. Maciver, *The contribution of sociology to social work*, New York, 1931, p. 2.) 科學は實際問題をも研究する。技術家はこれらの研究から資料を得ることが出来る。「然し科學はそれ自身實踐或は改良を指圖しはしなす。」(Ibid., p. 10.) 科學は一定の原因と結果の關係を示すが故に、技術家はその目的を達する方法に就いて暗示を受け得る。科學はこの以上に進まうとしないが、技術は更に進んでこれらの方法を實行に移さうとするのである。これら科學と技術との關係に就いて云はれる所は、すべて科學と社會事業との關係に就いても云はれ得る。而して今日科學と社會事業とが如何に密接な關係を有するかは即ち本篇に於いて觀察しようとする所であるが、これらが如何に接近しようとも結局社會事業知識が技術であることに變りがない。社會事業の取扱ふ現象に就いて今日の如き科學的研究が進められれば、社會事業の諸種の側面に對する諸種の應用科學は可能である。然し社會事業知識そのものは、應用科學ではあり得ない。「一は實際的應用に充當し得るやうになされた科學であり、他はその科學が利用される、實踐である。」(H. N. Shenton, *The practical application of sociology. A study of the scope and purpose of applied sociology*, New York, 1927, p. 193.) 又或る定義に従へば職業的社會事業とは、「人間福祉の爲めに社會組織と手續とを科學的標準に従つて作り出し・變化せしめ・或は調節する事業」である。(前掲拙稿本誌昭和七年九月五二頁) 社會事業が實踐である以上、此處に「人間福祉の爲めに」と云ふ言葉を以つて表された倫理的價値の世界へ當然入つて行かねばならない。然るに人間福祉は科學を以つて決定し得ぬものである。勿論科學はその決定に参加し多大の援助を與へることは出来るけれども、究極の決定はその時々集團的判斷に基いてなされる。斯くして、現今斯かる決定をなし得る科學の可能を認めて

社會事業知識を科學として體系づけることに努力して居る研究者もあるが、畢竟それは技術であるとして一般に認められて居る。(海野幸徳著、*社會事業學原理*、昭和五年、一一一六頁、同上、*社會政策概論*、昭和六年、三三一—三三二頁) H. A. Phelps, *Sociology and social work*, in *Trends in American sociology*, edited by G. A. Lundberg, Read Bain and Nels Anderson, New York, 1929, pp. 327-8. Read Bain and Joseph Cohen, *Trends in applied sociology*, in *Trends in American sociology*, pp. 350-353. Maciver, op. cit., pp. 1-10. Shenton, op. cit., pp. 27-8, 31-2, 193-4.) 而して社會事業は一定の目的に對して社會關係の變化を生ぜしむる有意的努力であると云ふ意味から、その知識は政治・教育・宗教事業・醫術・等と共に社會技術と稱せられる。(Shenton, op. cit., p. 175.)

社會事業が右の如く技術である以上、その科學との關係は、根本に於いて一般的な技術と科學との關係に他ならぬことは云ふまでもない。本篇に於いては、社會事業がその依存する諸科學から從來如何なる態様に於いて寄與されたか、又將來如何なる可能性が認められるか、更に又反對の方向に社會事業が科學の發展に貢獻するのは如何なる態様に於いてあるか等を考究して、技術としての社會事業の可能性と科學の發展に對するその意義との一端を明かにしたいと思ふ。

二 社會事業に對する諸科學の貢獻

科學の社會事業に對する貢獻に就いて、個々の科學別に觀察して行きたいと思ふが、以下に述ぶる科學のみが社會事業に貢獻する科學の全部ではないことは云ふまでもない。或は又こゝに省略された科學は、その貢獻が比較的
 重要ならざるが故に省略されたと誤解されてもならない。それらが省略されたのは、技術一般に對する貢獻のう

ち特に社會事業に對する固有の貢獻として、此處に取立て、述べべきものが無いと看做されたからである。哲學・史學・政治學・法學・等がこれに屬する。特に社會事業に對する貢獻がこゝに取扱ふに値すると看做さるゝ科學は、(一)經濟學(二)生物學(三)心理學(四)社會學である。

(一) 經濟學、社會事業の發展史上最も早く貢獻する所のあつた科學は經濟學であらう。何人でも貧困と貧困者の疾病との問題に於いて經濟的側面を最も容易に認めることが出来るし、且つ又今日に於いてさへ、財政的救助或は無料の醫療救助が行はるゝと否とを問はず、或は又就職の道と否とを問はず、先づ經濟的側面から取扱を進めねばならない場合が非常に多いから、自然何人も個人々々の困窮の經濟的側面により、大なる注意を拂ふ。従つて科學者中社會事業に先づ最初に貢獻したのは經濟學者であつて、彼等はマルサス以來相當に社會事業に對して關心を示し、英國に於ける一八三四年の救貧法改正には、博愛主義者と争つて却つて多大の貢獻をなした。當時の救貧法が過度に放漫なる救恤を行つたことに對して、經濟學者はその自由放任主義より救恤の緊縮を主張したのであつた。後に彼等が自由放任主義を強調しなくなつてからは、一層社會事業に寄與し得ることとなつた。(Amos G. Warner, *American charities: A study in philanthropy and economics*, New York, 1894, pp. 3-21.) 斯くして一八九〇年代までは、生理學・心理學も無視されたわけではなかつたが、最も優越せる影響を與へたのは經濟學であつた。社會事業研究に關する古典とも云はるべき Amos G. Warner が一八九四年に著した *American charities* (前掲)も、貧困の原因・救貧事業・その經營或は行政・等の研究に殆ど全卷を捧げて居る。又社會の經濟的發展と伴つて社會事業の必要が増大し、従つてその技巧にも進歩を生じて來たことは明かであるから、經濟上の諸變化は社會事業發展の重要な因素と云はねばならない。かゝる觀點から云つても經濟の知識を與へる經濟學が大なる貢獻をな

し得ることは十分認めらるべきである。社會事業に對する批判者の一派は、社會事業家の取扱ふ問題は根本に於いて現經濟制度の缺陷に起因し、社會事業家の努力は單に結果のみに働きかけるに止まり原因たる經濟制度の缺陷に對しては何等關係する所がないから、結局それは却つて現經濟制度の缺陷をしてその生命を持續せしめるものであり無益有害なるものであると云ふ。この批判は少くとも一部分眞理であつて、社會事業家はその努力を有益な方向に用ふるが爲めに慎重に行動せねばならないが、それには經濟學の研究は一つの重要な指針を與へるに役立つのである。加ふるに近年經濟學界に於いて所謂制度主義或は行動主義と稱せらるゝ學派の興隆したことは、斯學と社會事業との接近を益々促進して居る。この學派は「貨幣及び價格決定・現在高度に機械化されて居る生産設備・企業最近の諸相・これら諸制度の根底にあつてすべてこれらのものに於いて『諸權利』を有する者の利益を保護する所の私有財産制度」等の諸制度の機能をその研究の基底とし、これらの制度に據つて營まれる人間の經濟生活を、その客觀的表示である所の人間行動を通じて、觀察しようとするものであつて、從來の經濟學上に於ける形而上學的な假説に頼ることなく、客觀主義的研究に新しく出直さうとする。斯くの如き實際狀態の觀察から出發しようとする學派の興隆に依つて、斯學が社會事業と一層接近するに至つたことは疑ひがない。例へば低賃銀・收入過少・失業・季節的失業・罷業・住宅・産業上職業上の疾病・兒童勞働・勞働に従事する母親・等の如き問題は、その取扱に於いて斯くの如き經濟學的研究から特に得る所が大である。最後に社會事業は、それが政府當局に依つて行はるゝと民間社會事業團體に依つて行はるゝと或は産業家・勞働組合等に依つて行はるゝとを問はず、常にその經營上の諸點に關して經濟學的考察を必要とすることは云ふまでもなす。(Amy Hewes, *The contribution of economics to social work*, New York, 1930, pp. 16-22, 46-63, 106-124. Maurice J. Karp, *The scientific basis of social*

work: A study in family case work, New York, 1931, pp. 92-6.) 斯くの如く經濟學は社會事業に對して、その行動方針の決定に就いても・その問題取扱の技巧の方面にも・その經營の方面にも・貢獻する所が大であり、且つ又斯學最近の發展から今後一層大なる貢獻を致すであらうと云ふ傾向が認められる。

(二) 生物學、前項に述べた如く最初は慈善事業の對象たる貧窮状態に就いてその經濟的側面しか重要視されなかつたが、第二世紀に入つて、これらの貧窮状態の重要な因素として疾病の影響も亦著しく注意されるに至つた。一時社會事業家は悪行の起因をとすれば扁桃腺及び腺状組織の異常に歸し勝ちであつたり、又その後一時は内分分泌腺の故障を原因とし勝ちであつた。一九二五年に於いてすら、社會事業家との協力から有名な米國の一醫師は、「我々の見地からすれば、積極的或は調和的な社會力も、消極的或は非調和的な社會力も、すべて無生物に作用すると同一の物理的化學的のエネルギーから發する。……物理的化學的の均衡が神経・腺・筋・細胞・とその周圍との間に保たれる間は、均衡のとれた社會關係が存在する。」と云つて居る。(Amos, G. Warner, Stuart A. Queen and Ernest B. Harper, American charities and social work, 4th rev. ed., New York, 1930, p. 218.) 斯の如く生物學的研究の旺盛となつた結果、今日に於いては醫療社會事業・公衆衛生事業・等が起こり、その他の社會事業分野に於いても取扱の著しき改善を見たことは明かである。然し斯の如き生物學的因素重視の立場の論理的歸結は優生學運動であつて、生物學に對する關心の生じた後間もなく社會事業家間に優生學及び遺傳の法則に對する關心が生じたのは當然であらう。この關心は主として精神的缺陷の方面に向けられたので、次の心理學の項に述ぶることゝするが、かゝる立場から社會事業に對して一つの批判が生じたことをこゝに注意して置かう。即ち社會事業家の取扱ふ困難者には身體の缺陷あるものが多いが、これらの救助に努力を費しても遺傳を防止せねば禍根を絶つことが出

來ぬばかりでなく、これら劣悪な血統は蕃殖率が大であるから却つて後世に對して有害な結果を生ぜしめると主張するのである。然し後に生物學的遺傳に對して社會的遺傳の重要性が強調されるに従つて、この批判の勢力はうすらうで來た。(Macy, op. cit., pp. 26-34.) しかも猶社會事業に於ける生物學的遺傳の問題は解決されたわけではなうのであるから、將來この方面に對しても生物學の寄與する所は注目し値する。(Warner, Queen and Harper, op. cit., pp. 217-8. Karpf, op. cit., pp. 86-92.)

三、心理學、一般心理學・應用心理學殊に教育心理學・變態心理學・精神病學・等はそれぞれ今日の社會事業にとつて必須の用具となつて居る。一般心理學は、社會事業家に對して、その取扱ふ人間の精神活動即ち動機・感情・意向・記憶・被暗示性等に就いての理解力を附與する。應用心理學殊に教育心理學は、本能及び感情の修正、感覺・知覺・運動整序・記憶・想像・不可離聯想・意向・判斷・等の發展を取扱ふものであり、これらの知識は學校に限らず家庭・街頭・工場・クラブ・劇場・運動遊戯場・醫師の診察室・病院治療所・等に於いて利用され得るものであるが故に、従つて社會事業に於いて利用される範圍は極めて廣い。然しこれら二者の寄與する所は、變態心理學・精神病理學の貢獻程には顯著でない。變態心理學・精神病學は、狂癲者・精神薄弱者・その他の精神病者・の精神異常を取扱ふものであつて、社會事業家の取扱ふ人間の中には斯かる精神状態にあるものが多いから、現今では精神衛生運動に大なる力が注がれ、精神病社會事業と稱せらるゝ特殊の分野すら認められて居る。元來精神病者は、歐米に於いても第十七世紀に至るまでは、何かの悪魔に憑かれたものと看做され、従つてそれに對する取扱は祈禱・鞭打・焚刑・刺絡・等であつた。第十八世紀に於いては貧困な精神病者は、すべて放置されて居たか或は牢獄・救貧院・等へ幽閉して置かれ、その取扱は殘虐を極めた。第十九世紀末に漸く精神病學が生まれて、精神病は他の疾病

同様に治療し得るし又豫防もし得るものであることが認められた。これに基いて精神衛生運動が後に社會事業の重要な分野として發達するのであるが、しかも一時その發達を阻止された時代があつた。即ち一九〇〇—一九一五年頃米國に於いて優生學から出發した運動の旺盛なりし時代である。その頃ビネー・シモン精神検査法が流行し始めて、全米國にわたつて精神検査士が活動したが、彼等は、囚人・賣春婦・未婚の母・浮浪人・失業労働者・労働煽動者・その他の「厄介な人達」に就いて、精神薄弱者が非常に高い割合を占めることを發見したと稱した。これが眞であるとすれば、精神薄弱者は頗る多數に上り、當時の收容機關では甚しく不十分であつた。他方に於いて斯かる劣弱な血統は自由に放任さるゝ時は、優秀なる血統を壓迫して蕃殖する傾向があると喧傳されたが爲めに、これらの取扱は俄に重大問題視さるゝに至つた。その結果、社會に害ありと認めらるゝ素質を遺傳する精神的缺陷の所有者は去勢さるべきことが、十五州の法律に規定され實施された。然し後に生物學的遺傳に對する社會的遺傳の重要性が認められ、且つ又諸種の見地より反對論が現れたが爲めに、其後間もなく去勢に對する關心は甚しくうすらいでしまつた。若しかゝる運動が盛んに續けられたならば、精神病の方面に於いて社會事業の活躍する餘地は非常に狭められる所であつた。この危機を通過した後は漸次發展を遂げ、歐洲戰後所謂精神衛生運動が著しき成長を示すに至つた。一九二七年に或學者は、社會的・經濟的・法律的等の諸問題は結局諸種の情緒的混亂殊に憂慮・恐怖・有罪の感及び劣等の感・等より生ずることを述べて居る。全く現代に於いては社會事業に於ける最も優勢なる觀點は、經濟學的でもなく生物學的でもなく、又普通の意味の心理學的でもなく、むしろ精神病學的觀點であると云はれる程になつた。(Warner, Queen and Harper, op. cit., pp. 218-9, 246-260. Karpf, op. cit., pp. 101-110. James H. S. Bossard, Problems of social well-being, New York, 1927, pp. 508-510.)

(四) 社會學、精神病學が社會事業の著しい發展を齎して居る間に、他方社會學が社會事業家の注意を引き始めた。その結果彼等は漸次に、「人格を神經系統の函數であると同時に社會關係の函數であるとして」考究するに至つた。彼等は家族・近隣・共同體・産業的人種的その他の諸集團に注意を向け、個人と集團との關係に對して益々大なる關心を示すに至つた。(Warner, Queen and Harper, op. cit., pp. 219-220.) 社會學に於ける最近の發展は、その社會事業との右の如き接近を可能ならしむるに與つて力があつたのである。即ち社會學に於いても經濟學の場合と等しく、行動主義の見地に基く社會現象の現實的觀察と客觀的敘述とが盛んに行はれ始めたが故である。社會學は集團・その諸關係・慣習・傳統・世習等の研究をなすものであり、これらに就いての任意の一集團又は任意の特定時代の道徳的評價に依つて何等正式の制限を蒙らない。社會學が集團や個人を研究するのは、人間結合の諸事實から科學的概括を形成しようとする目的の爲めに他ならない。それは研究に於いては客觀的であり、その目標に於いては、集團生活に關する我々の知識を増大せしめようと努力する範圍に限り實際的である。これらの諸過程に於いて社會學はその時の標準又はモーレスに依つて制限されない。他方社會事業は可塑性を有する實際的規則の一體である。その理論の目ざす所は、社會環境がその習俗及びモーレスに鑑みて許す限りに於ける、個人又は集團と社會環境との間の調和的調節である。(Phelps, op. cit., pp. 328-9.)

社會事業は時には單なる救濟を行ひ、時には進んで常態への復舊をはかり、時には更に進んで豫防的手段を講ずる。これらすべてに對して、原因の究明は常に重要である。而して社會事業は、原因の究明の爲めにも前述した經濟學・生物學・心理學に依頼することは勿論であるが、原因のうち社會的接觸から生じたものの極めて重要なことが認められる時、社會學は始めて有力な援助を與へる。社會事業の背景としての社會學は、集團行動に關する概括を

提供する。その概括から統制の技巧が構成され得るのである。社會事業は社會統制に一定役割を果すことを目的とする。と自稱して居る。即ちそれは個人的集團的の不調節の場合を取扱ふ爲め組織されて居ると云ふ。乍ら社會事業はそれ自身の力を以つてしては、個人と集團との關係に就いて適切な研究をなすことの出来ぬ場合が屢である。(Ibid., p. 331.) 社會事業家は一つの事件が個人的な原因から生じたものか社會的接觸から生じたものか決定し得ぬことが屢ある。社會學は斯の如き場合に、有力な援助を與へることが出来る。例へば、社會學の素養ある社會事業家は、都會生活及びその附隨物が一家に生ぜしめた諸變化を認知することが出来、家族の古來からの結合性を破壊し去る諸力・現代の産業的文明が齎した所の不安定と孤獨とを考慮して家庭を観察することが出来、或は又、出産率減退の諸原因とその力の影響が極貧家庭に對してはより、緩漫にしか現れぬことを理解して居り、又相異なる民族集團の相異なる家庭モークスが新しい環境に順應する過程に於いて惹起する衝突を識別することが出来る。斯くしてこれらの社會事業家は、諸種の困窮状態の原因を比較的によく理解することが出来、従つてそれに對してより適切な取扱の技巧を見出すことが出来る。(Mayer, op. cit., pp. 134.) 斯くの如く技巧の方面に於ける援助のみならず、社會學は他の方面に於いても社會事業に寄與する所が大である。それは大別して社會事業家の社會哲學形成の方面・社會事業本質の認識の方面・の二とすることが出来る。社會事業家は人間の福祉を究極の目的とするものであつて、當然如何なるものが人間福祉なりやに就いて一個の信念を有せねばならぬ。然らざれば彼等は仕事の價値に疑問を抱くに至るであらうし、且つその仕事を正しい方向に進めて行けないかも知れない。「結局自分達は何をして居るのだらう。……貧困と不調節の生じて來る社會的及び經濟的・遺傳的及び制度的の諸條件には、我々は手を觸れないで居る。我々の取扱ふのは失業者であつて失業ではない。我々の取扱ふのは結果であつ

て原因ではない。而して原因が存続する限りは結果も何時までも續く。我々は永遠の戦争の擔架手と看護婦だ。」(Mayer, op. cit., p. 6.) 斯の如き疑問を解決し正しい方向に仕事を進め得る爲めの社會哲學の形成に、社會學は大いに寄與するのである。人間は社會に生活する以上何人もそれぞれの社會哲學を持つて居るには相違ないが、我々の訓練されてない社會哲學では十分でない。他の哲學と同様社會哲學も亦科學に依つて訓練されることを要する。而してこれが、先づ第一に、社會學が社會事業家を援助し得る點である。科學は哲學を創造しないが、しかもそれは我々の哲學を修正し・防衛し・純化する。經驗も哲學を創造するには十分ではない。それは我々の哲學が解釋せねばならぬ所の・又それと撞着してはならぬ所の・材料を與へる。斯くして社會學は社會哲學と社會經驗との中間に入り來たるものであり、これら三つはすべて社會事業家にとつて必須要件である。……援助したいと云ふ願望は本能的反應であつて、それから社會事業が成長して來たのであるが、それは偉大なる動力である。然しそれはそれ自身では盲目に等しい。それが哲學に發展する時にのみ、即ち人間のなし得べきこと及びその成就の手段に就いての廣汎な思惟に發展した時にのみ、それは理性的となる。(Ibid., pp. 80.) 勿論社會事業は多くの科學から援助を受ける。然し社會學者は、この點の貢獻は特に社會學のものであると主張する。「若しそれがこの奉仕を提供出来ぬなら、社會學それ自身が非難さるべきである。何となれば社會學は社會諸關係の科學であり、社會事業は、特定の社會事態に於いて個人を悩ます所の一定の不快事と不調節とを救済し或は除去する爲めに案出された技術であるから。」(Ibid., p. 9.)

次に社會事業本質の認識の方面に於いて、社會學は如何なる貢獻をなし得るであらうか。「社會學は社會の運動傾向を發見しその跡を辿ることを主要なる課題の一とする。少くともこれらの運動の或物は進化的の性質を示す。換

言すれば、より單純なる社會からより複雑なる社會への推移と不可避的に關聯して居る。我々は、社會組織の變化を生ぜしめずして、交通手段の改善も行ひ得ず、科學上及び技巧上の進歩も利用し得ず、産業化され専門化され都會化されることも出來ず、我々の物質的繁榮を擴大することも出來ない。これらの社會的變化は偶發的のものでなく、或る一定の方向を示して居る。換言すれば、社會進化は實在性である。社會事業はそれ自身、主として社會進化の結果である。それはより複雑な型の社會の一機關であり、その複雑さに相應する必要より生み出された。従つて社會事業家がその社會的職分を生ぜしめた所の諸條件を理解することが重要である。彼のその職分に對する態度・その重要性の意識・は斯の如き知識に依つて變化させられる。(Ibid., p. 60.) 社會がその複雑さを増すに従つて諸種の人間關係は著しく稀薄となつた。個人や家庭集團はその隣人達や共同體から引離されて古來これらから受けて來た救援を失ひ、複雑なる産業經濟の發達に依つて個人々々は自活する責任を負はしめられ、加ふるに競争産業經濟の發展の結果人は從來存在しなかつた多數の新しい危険及び新しい型の不調節に直面せねばならなかつた。家庭を持たぬ多數の人間が生じ、不健康な者は生きて行けず、災害と失業は生計の資を得る途を絶つた。これらはすべて經濟制度の結果であつて、それが改善されるまでは除去することの出來ぬものである。従つてその間矯正と救済の方法が講ぜられねばならない。加ふるに現代は制度化された世界であり、その巨大なる非人格的な制度は、標準化された制度をなして個人々々の不幸に就いて顧慮を與へることが少い。故に個別化された保護と取扱に依つて補足されねばならぬのである。即ち社會事業は他の社會制度の欠陥を補足する社會制度である。斯くして「社會事業はそれ自身進化的所産である」(Ibid., p. 60.)と云はねばならぬ。社會事業の本質を斯くの如く認識する時、社會の進化に伴つて社會事業にも進化がなければならず、今日の社會に對して舊式な素人特志家の慈善事業は無力である。

かりでなく却つて有害であることを、社會事業家は教へられる。同時に又彼等は、社會進化と共に國家の行ふ社會事業の範圍が漸次擴大し社會立法が益々行はるゝ傾向に對して、民間社會事業の特殊職分が、制度化した大量取扱に傾かざるを得ない政府當局の社會事業の補足として、柔軟性を有する社會事業を維持し一方社會狀態の變化に・他方個人間の相違に・順應せしむることであることを教へられるのである。(Ibid., pp. 62-80.) 最後に社會學は、社會事業に加へられた批判を反駁して社會事業の存在理由を擁護することに依つても亦、社會事業家のその事業の本質に對する認識を深める。この批判は大別して、自然淘汰論からのもの、遺傳の法則からのもの・及び經濟的決定論に基くもの・の三種とすることが出来る。第一の批判はダーウィン自身から出て來たもので、彼は、野蕃人の間にあつては自然淘汰の結果として身心の虚弱なるものは除去されるが、文明人は斯る虚弱者を生存せしむる爲めに最善の努力を盡くすことを指摘した。然し社會環境の影響を強調する社會學の見地よりすれば、虚弱者も強壯者となり得るのであるし、且つ又失業の如く現代の社會經濟制度に附隨する欠陥から自然淘汰論者の所謂不適者となつた者には、當然社會が連帶責任を負はねばならぬ。社會事業に依ると否とを問はず何等かの方法で、社會がそれらの人々を救済せねばならぬのである。第二の批判は生物學の貢獻と關聯して前述して置いた遺傳の法則から出發する批判であるが、これも社會環境の影響の重要性を強調する社會學者から見れば明かな誤謬である。第三の經濟的決定論に基く批判は又二種に別かれる。一は個人主義的他は社會主義的のものである。即ち前者は人の窮狀をその人自身の責に歸し、従つてそれらを救済する要なしとするものである。これは形而上學的な自由意志の教理をその根底に藏して居り現實狀態の研究に基いて居ない點に於いて錯誤を犯して居るし、又假に經濟的成功者はその努力と能力との報酬を得たのに對して貧窮者は努力に於いても能力に於いても欠けて居たが故にその地位にある

としても、斯る貧窮者を救助してはならないと云ふ有力な理由は示されていない。第二の社會主義的の經濟的決定論は、一切の社會悪の根源は經濟制度に存するが故に、社會事業家の仕事は單なる彌縫手段であり搾取的資本主義の感傷的支持であると主張する。社會學者はこれに對して、現在社會事業家の取扱ふ問題の恐らく大部分が經濟機構から發して居ることを認めるけれども、しかも猶この批判の二つの點に就いて社會事業家が反駁し得ることを示す。即ち第一にこの批判は、問題を單純にし過ぎて居る點換言すれば社會事業問題の社會的因素と共に個人的因素も亦重要なことを無視して居る點である。如何に經濟制度を變化せしめようとも、個人的因素は存続する。第二の點は經濟的因素は眞に重要であるに相違ないが、しかもそれは社會事業家の職分を生ぜしめる唯一の社會的因素ではないことである。成程貧困は問題を複雑ならしめる。然し貧困が取除かれても、それは、精神的適應性及び社會的順應の狀態が、社會事業家を必要としない程度になることを意味しないのである。結局災害や不幸・衝突や不調和・遺傳的及び後天的の無能力・等は何なる社會にも存在し得る。(Ibid, pp. 22-39.) 但し社會制度の變化と共に當然社會事業も變化するのであつて、現在あるが儘の社會事業が如何なる社會にも存在するのでないことは云ふまでもない。社會學者は、斯の如く觀察して來ると、社會事業家の仕事は、斯かる援助なしに自身では社會環境の諸困難に打勝ち或はその需要に應ずることの出来ない個人を、その社會環境に調節する仕事として考へられよう」と云つて居る。(Ibid, pp. 39-40.)

以上述べた如く社會學は、技巧の方面に於いて・社會哲學形成の方面に於いて・社會事業本質の認識の方面に於いて・貢獻する所が大である。而して技巧の方面に於いては、特に社會研究の勃興に依つて貢獻する所は益々大となりつゝあるが、社會研究は同時に社會事業をして社會學の發展に寄與する機會を提供するものであるから次章に

述べることにする。

社會事業に貢獻する主要科學を、大體に於いてその社會事業と關聯しての重要性が注目され始めた順序に従つて考察して來た。これらはその重要性が社會事業家に依つて注目されるゝや、その當座は殊更重要視されるゝの常であつて、最初は經濟學が次に生物學が續いては心理學殊に精神病學が、最も貢獻する所多き科學なるかの如く喧傳された。現代は精神病學の時代と云はれたことは前述の通りであるが、しかも社會學の重要性が益々認められて來たことは疑ひがない。而してこれと關聯して人類學・社會心理學・人間生態學・等も有用なることが明かにされて來た。然しこれらは前に擧げた諸科學に比して、その社會事業にとつての有用性が主として社會學の手を通じて始めて顯著となり得る意味に於いて、第二義的のものと看做すことが出來ると思ふ。従つて、此處にこれらに就いて述べる余裕のない爲め省略しても、さしたる支障は來たさなと思はれる。

現今の社會事業に於いては分化・専門化が高度に發達して居るが故に、その各分野の性質に應じて各社會事業機關がそれぞれ主として依據する科學も異なつて居るに相違ない。例へば醫療社會事業は生物學に、精神病社會事業は心理學・精神病學に、家庭社會事業は社會學に、それぞれ主として依頼するが如きである。然し如何なる事業分野でも結局社會に生活する人間を一體として取扱ふのであるから、諸科學中の一部にのみ依頼して他を輕視することは全く出來ない。

三 科學に對する社會事業の貢獻

一般的に云つて科學と技術との間には相互依存の關係があることは云ふまでもない。科學はその初期に於いては

技術から生まれて來たものであり、現在の如く兩者の間に判然たる區別が劃されて居ても、技術家の狭い乍らも深い知識と經驗・その仕事に對する熱心さ・等に依つて、科學に新しい研究分野が導入され或は新しい研究資料が提供されることは事實である。社會事業と科學との間にも、當然前者は後者の發展に資すると共に後者は前者の進歩に貢献する相互依存の關係が存在する。而してこの關係は、最近の社會事業に於ける社會研究への旺盛な關心に依つて、特に明かにされたのである。社會研究は本來、諸社會科學が現實生活の觀察をその研究の出發點とするに至つてから、科學特に社會學の指導の下に行はれることとなつたのであるから、それは社會事業に對する科學の貢献の重要な一方面である。同時にそれは又、科學研究の素材の重要な源泉であるから、社會事業が科學に對して特殊の寄與をなし得ることを示すものである。而してこの方面を除いては、科學に對する寄與の特にこゝに擧ぐべきものがないから、本節に於いては社會研究に就いてのみ述べることにした。又前節に於けるが如く個々の科學毎に取扱はぬのは、それぞれ個々の科學に就いて、それに對する社會事業よりの研究資料提供の固有な態様を述べる十分な資料を有しないが爲めである。

社會研究は組織的方法を用ひて社會現象を分類し蒐集し表示し解釋し、更にその結果を組織して、確立された知識體系に附加さるゝ資料たらしめることである。その目的は新しき或は修正されたる觀點と標準との創造か或は熟練と方法との改善かである。即ち社會事業家側から云へば、その實踐と技巧との効果の評定と社會事業に關係ある社會問題の分析とによつて、その取扱を一層有效ならしめんとするものであり、科學者の側から云へば、斯くして得た資料に依り誤まれる假説を棄て、白紙の態度で研究を進めようとするのである。故に社會事業家のみ領域に屬するものではなく、同時に科學者の研究方法でもある。勿論斯くの如く同一の研究方法を用ふるからと云つて、

社會事業家もこの場合科學者であるとは云へない。社會研究を行ふ目的が前述の如く異なつて居るから、一方科學者は原因と結果の關係を追究することに關心を持ち、他方社會事業家は除去され得る原因にのみ關心を有する。後者にとつては除去され得ない原因に就いて研究する必要はない。此處に社會事業家の社會研究が科學に對する貢献を行ふ上に有する弱點が見出される。然し社會事業家は、現實社會と接觸して居り且つその取扱方法改善の必要から精細な取扱事件の記録をのこして居るが故に、社會研究に従事するには最も有力な機關である。斯くして社會事業家は或は科學者と協働して或は單獨に社會研究に従事して居り、社會研究に欠くべからざる要素となつて居る。

(Fred S. Hill and Mabel B. Ellis, editors, Social work year book, 1929, New York, 1930, pp. 415-420. Emory S. Bogardus, Contemporary sociology, Los Angeles, 1931, pp. 415-6.)

斯くの如く社會事業は社會研究を通じて科學に貢献し得るのであるが、然しそれが爲めには社會事業は一定の條件を充たさねばならない。從來社會事業とそれと關係ある諸科學とが、この兩者に共通の問題の研究にその力を結合せしめずに居たのは、全く用心が過ぎた。この點に於いてこそ、社會事業がそれ自身の特殊諸問題を科學的調査の適切な問題として提言することに依り、諸科學の資力を利用する機會が存するのである。然しこの運動は、社會事業の材料と問題とが科學的分析の諸要求に合致するやう形成されねばならぬと云ふ義務を伴ふ。(Phelps, op. cit., p. 327.) 而して現在の社會事業が斯る義務を果すには、次の三條件を満足せしむることを必要とする。この三條件を満足せしむることは科學へ貢献すると同時に、社會事業自身の爲めでもある。その第一の條件は社會事業問題の分類に就いてである。現在では問題の分類が不完全であることが多く、その爲めに取扱の記録及び統計が社會事業家にとつても科學者にとつても不満足な場合が多い。科學者は正確な知識を得ることが出來ず、社會事業家は多く

の取扱事件の比較研究をすることが出来ず従つて適切な取扱を行ふことは出来ない。例へば經濟學者が職業と疾病とに就いて經濟研究を行はうとした時、社會事業家の記録に「製靴工」とか「製帽工」とか云ふやうな包括的な名稱で記載されてあつては何の得る所もないであらう。作業の性質・作業状態・作業時間・等が記載されて居らねばならぬのである。(Hewes, op. cit. pp. 39-40) 社會事業家自身にとつても如何にそれが不満足な状態にあるかを、今一般に社會事業界に用ひられて居るやうな型の分類を例にとつて調べて見よう。それは米國のブルックリン慈善協會の發表した一九二六—一九二七年度の年報であるが、これに依ると五九種の「問題」が列記され、一八、五二人を含む三、五四〇家庭に就いてのそれらの問題の頻繁度を示してある。この頻繁度は家庭の問題として起つた場合と個人の問題として起つた場合との兩様に分けて計上されて居る。五九種の問題は(一)産業問題(二)身體的不能力(三)精神問題(四)社會及び行動問題(五)共同體問題と云ふ五つの廣汎な異類範疇の下に列記されて居る。(一)に屬するものは失業・半失業・收入過少(全時間労働にて)・負債・産業災害又は産業疾病による不能力の五種であり、(二)に屬するものは、肺結核・喘息・心臟病・微毒・痲痺・婦人病・内分泌障害・榮養不良(貧血)・その他慢性病(右を除く)・その他急性病(右を除く)・麻酔劑服用癖・酒精中毒・齒科的手當を要するもの・眼科的手當を要するもの・扁桃腺切開を要するもの・分娩・不具或は麻痺・盲目又は視力に甚しき障害あるもの・その他の畸形的或は感覺機關の障害・老年・病氣恢復期・死亡の二二種、(三)に屬するものは、癲癇・精神病と診斷せるもの・神經症と診斷せるもの・精神病又は神經症の疑あるもの・精神的欠陥と診斷せるもの・同上の疑あるもの・の六種、(四)に屬するものは、乞食性向・要扶助の子女を有する寡婦・同上の鰥夫・家族遺棄・要扶助親に對する不扶助・家庭の不和・家族不扶助・子女閉却・入獄・非合法的労働に従事する子女・不規則學校出席・年少者感情性犯罪・性的不道德の知れたるもの、

不良家政・その他の行動問題・私生兒・追立通告を受けしもの・その他の法律上の紛糾・親族の冷酷の一九種、(五)に屬するものは、不良住宅・稠密過度(一室二人以上)・非居住者又は移住問題・非公民・書き又は讀む能力なきもの・英語を話す能力なきもの・その他の職業上又は教育上の必要の七種である。(Parsons, op. cit. pp. 334-6) この分類を見るに、これらの問題が大部分社會問題ではなく、單に獨立した因素であるか或は諸因素の複合であつて、取扱はるゝ問題の社會的性質を示すものもあり示さぬものもある。個々の疾病の如きは何等の社會關係も表して居ず、それは問題の一因素に過ぎない。従つてそれらにあつては問題の名稱は判然として居るが社會關係を示すものになると明確ではなくなる。例へば「失業」の如きそれが何か個人的欠陥に基くか・産業災害に基くか・その職業の一時的不安定からか・或は産業一般の不況の爲めか・を全く示して居ない。又「不規則學校出席」のやうな單なる困難の症状と「失業」の如き社會問題の一般的經濟的因素とが肩を並べて居る。要するにこれらはすべて問題の因素又はその複合であつて社會事業の取扱ふ問題を示して居ないのである。第二にはこの分類は、取扱はるゝ家庭は人間の集團であり取扱はるゝ個人々々も人間であることを無視して居る。例へば同じ「要扶助の子女を有する寡婦」の名稱の下に數へられる二人の寡婦の場合でも、その取扱は人を異にするに従つて甚しく相異し得るのである。換言すれば社會事業問題は恐らく多くの因素から成立つものであつて、寡婦たる境遇にあることはその一因素に過ぎず、この二人の寡婦が含まるゝ社會事業問題は全く異なつて居るかも知れない。醫術に於いて、醫術の問題及びその原因に關する知識が進むに従ひ、それが救済方法を編み出して治療に着手したのは病氣ではなくて病氣にかゝつた人間であつた。同様に社會事業は、失業や精神的欠陥や遺棄やの場合を取扱ふものではなく、これらの不調節状態にある人々を取扱ふ。(Ibid., p. 341) 第三にはこの分類は、何が主要な困難であるかを示して居ない。換言すれば個々

の因素の比較的重要性を示して居ない。ありふれた重要でない困難例へば「教育の必要」「食性向」「不良家政」「齒科的治療を要するもの」の如きが、「失業」と稱せられる重要な諸因素の複合體と同一に扱はれて居るのである。要するに斯かる不完全な分類の行はれて居る現在に於いて、社會事業を有効に行ふ爲めには、先づ第一にその問題即ち社會的不調節が如何なるものかを示し、次にこれらの不調節を構成する諸因素が明かにされるやうに分類を改めねばならない。此處に擧げた分類の例に於けるが如く、社會事業問題が示されずに單に因素を列擧したのみでは、社會事業問題が如何なるものなりや従つて如何なる取扱を行ふべきやを知ることが出来ない。丁度疾患の性質が理解されない前に身體的疾患を取扱つた醫師の如くに、社會事業家はその問題の諸原因或は諸分岐に就いて何等の知識も持たずして、その問題を取扱ふことを余儀なくされて居るのである。(Ibid., p. 341.) 分類に伴ふ困難は實に巨大である。諸因素が相互に作用し反作用する結果は、眞に奈邊に社會事業問題が存するかを見極めることに大なる困難を感じしめる。加ふるに社會事業機關の目的に應じてそれぞれ異つた分類が必要である。社會事業家は實用主義的な・時には無方針と見えるやうな・分類を行ふが故に以上の如き不満足な結果を生ずるのに加へて、倫理的・主觀に基く不確定な名稱を用ふるが故に、その意味が明確を欠く場合が多い。例へば良不良・優秀劣等・道德不道德・等の如き名稱は、適當な記述的語彙と代へられねばならぬ。(Maciver, op. cit., pp. 85-7.)

社會事業家が科學に貢献し得るが爲めに満足せしめねばならぬ第二の條件は、社會問題と經濟問題とを適當に差別することである。貧窮者に就いての不調節には貧困に因由しないものも多い。然るに現在の社會事業家は未だに猶問題の經濟的側面のみを殊更重視する傾向を失つて居ないので、貧困そのものの救済に専心し、社會的不調節には注意を拂はぬと云ふ危険が多い。社會事業問題の分類が不完全なもの、一つはこの理由から生じて居る。第三

の條件は、社會事業家が單に目前の救済に努力するのみならず、困窮の根底に横はる諸條件の發見と統制に關心を持たねばならぬことである。社會事業をより效果的に又豫防的に行はうとする爲めにも、個々の取扱事件の生じた近因を探るのみならず、更にその根底に徐々として作用して居る基本的條件を究明せねばならぬ。社會事業家は「一因素が他の因素から・個人がその集團から或はその環境から・一事件或はその近隣集團がより、大なる社會的單位から・絶縁されることは全くないのを認めねばならぬ。彼は殊に次の如き假定に對して身を守らねばならぬ。即ち彼の特に関心を有する所が特定の諸事態に局限されて正しいのだから、彼の取扱ふ問題を促進する諸條件或はその解決に必要な救済手段も同様に局限されねばならぬ」と云ふ假説である。(Maciver, op. cit., p. 90.)

以上の三條件を充たすことは社會事業自身の發展の爲めでもあり、しかもこれらに就いても科學の援助を受けねばならぬものであるから、右に述べて來た所は、當然科學が社會事業に對して貢献し得る諸局面をも示して居ると考へられる。乍然これら三條件を充たすことに依つて始めて社會事業は科學に大なる貢献をなし得るのである。即ち斯くして後改めて科學的研究資料の豊富なる源泉となり得るのである。例へば經濟學者は、職業と疾病の關係を知らうとしても此度は依據し得る資料を與へられるであらうし、失業の諸結果・社會保險制度實施の成績・等を知らうとしても多くの資料を得るであらう。又心理學者は、欠陥ある兒童を社會事業團體から個人の家庭へ預けて養育せしめると云ふ兒童保護の一方法實行の記録から、兒童の知能が單に生得的のものとしてのみ考へられず家庭的環境に依つて深甚なる影響を受けることを證據立てる資料を得るかも知れない。乍然資料の源泉としての社會事業は特に社會學に對して重要性を有する。社會事業家は先づ第一に社會事態の諸型を分類する上に於いて社會學者に助力し得る。多種多様の社會問題を有効に取扱はんが爲めには、それらの問題自身及びその發生する社會的環境を分

類せねばならぬ。社會事態の複雑性と多様性は、社會學者社會事業家の兩者を共に困惑せしむるものであるが、社會事業家は多くの具體的事態と直接に接觸して居ること及び同じ事態に就いて或る期間その變化を注視し得ることとで特に有利な立場にある。第二に、社會事業家が斯くの如く一社會事態の推移を注視する任務を有すると云ふ理由から、社會學者が集團生活の諸過程を研究するに當つて助力を與へることが出来る。社會學の最も困難且つ基本的な課題の一つは、社會的調和に貢献し或は妨害を與へる所の結合的或は分裂的諸力を、その結果に於いてのみならずその作用に於いても理解することである。(Ibid., p. 82.) 而して斯くの如き諸力は、近親集團即ちあらゆる社會構造の單位なる第一次的集團に於いて最も親しく觀察され得る。大規模の調査や統計的方法是不適當であつて、個別的な研究方法に依り社會事態に接近して觀察を行はねば斯る知識は得られないのである。第三には、社會事業家は社會原因力の研究に於いて社會學者に寄與することが出来る。社會事業家は、その取扱の成績を確める必要から、取扱の効果を助け或は減殺する諸因素を觀察する必要から、社會的不調節を來たす諸種の因素と・調節の基本方法と・を見出す必要から、常に社會的原因力の實驗を行つて居るものと看做すことが出来る。現在の社會事業が科學に貢献するが爲めに充たさねばならぬ三條件を前に述べたが、社會學に對する右の三様の貢献をなすが爲めには、第一の貢献には第一の條件を、第二第三の貢献にはそれぞれ第二第三の條件を必ず満足せしむることが必要である。(Ibid., pp. 81-99.) 斯くして我々は社會事業が特に社會學に對して離れることの出来ない關係にあることを認めねばならぬ。

四 結語

以上に述べて來た所から、現今の社會事業が科學的方法の採用に依つて自由職業として認めらるゝに至つた程の

進歩を遂げながら、しかも猶科學との協働に依つて兩者とも十分に利益され得る程には至つてないことが見出された。等しく社會技術であつても教育の分野に於いては、先に心理學而して最近には社會學の應用科學が形成されつゝあるのに、社會事業の分野に於いては未だ斯かる情勢の發展は認められないやうである。故に本篇に於いても、現實に於ける社會事業と科學の依存關係と云ふよりはむしろ可能性に就いての考究が行はねばならなかつたのである。然らば何故に斯の如き状態にあるのであらうか。或る著者はこれに對して、科學者側と社會事業家側との双方に種々の理由を發見して居る。彼の科學者側の理由として擧げて居る所は、科學の分化及び専門化と云ふ事實である。現今では「社會科學者」は全く居ずに社會科學の一部門の研究に従事して居る人達例へば人類學者・經濟學者・史學者・政治學者・社會學者・等が居り、「自然科學者」の代りに化學者・物理學者・天文學者・等が居る。しかも經濟學・政治學・社會學・等の如きに於いては、更にその内部に於いて分化が生じて居る。斯くの如き状態では、學者は個々の科學に就いてすらその全般にわたる知識を所有せず、殊更社會事業に就いては一層知る所が少いであらう。従つて社會事業に對する應用の如きを考究することは、極めて困難となると云ふのである。然しこの理由は、この儘ではさして重要視出来ない。何となれば教育の方面に應用科學が成立して居るのに、社會事業に於いて何故成立しないかの理由が示されて居ない故である。又社會事業家側に關する理由として擧げられて居る所は、要するに社會事業家が科學的精神に欠けて居ると云ふことである。即ち先づ第一には、社會事業研究に従事する著述家達が大部分社會事業現業員の出身で、科學的知識を十分に所有して居ないこと、科學が社會事業と關聯して重要性を持ち始めたのは比較的最近のことであり、右の如き研究家の中に科學的素養を有する者があつてもその素養は現在役に立たぬ程古いものであること、第二には現今余り多くの社會事業研究の文献が社會事業家を惱まして居り、しかも

現實に於いて彼等は斯かる文献に依つて研究する必要のないやうな非科學的の事業方法を用ひて居る者が多いこと、第三には、社會事業家の態度が極めて現實的であつて直接にその現業と關係のある事項にしか關心を示さない傾きのあること、第四には、社會事業家養成の學校に於ける教員達のうち、諸種の科學の講座を擔任する人々は社會事業に就いての知識を欠き、それぞれの科學を社會事業と關聯せしめて講義を行はなしたこと、等である。(Karpf, op. cit., pp. 78-81.) 而してこの著者の見地からすれば、科學者の側に於けると同様に社會事業家の側に於いて著しい専門化の傾向の存することも一理由として追加されねばならないであらう。乍然孰れにせよこの著者は、社會事業と科學の協働の遅々たる理由を單に双方當事者に就いて求めるのみであつて、更に根本的な理由を社會事業の性質そのものの中に見出さうとして居ないやうである。他の方面に應用科學が成立して社會事業に成立しないのならば、主として社會事業の性質の中にその根本的理由が見出さるべきであらう。右に擧げられた科學者側についての理由にしても、社會事業の性質の中に科學の應用を特に困難ならしめるか或は科學者の關心を刺戟しないもののあることとが認められなければ、さして重要視することは出来ない。又社會事業家側に就いて擧げられた理由にしても、何故に彼等の斯かる態度が生じたかが示されねば無意義である。而してこの場合に於いてもその説明は主として社會事業の性質そのものの中に求めらるべきであらう。或る學者は、社會事業が實際上主として貧窮者を取扱ふと云ふ事實から、その發展を阻害されて居ることを指摘して居るが、それはその儘我々の求めて居る説明を與へると思はれる。即ち彼に従へば、社會事業が貧窮状態のみならずそれとは直接に關係なき方面例へば娯樂事業・精神病事業・共同體組織事業・等にも重要な任務を有し、且つそれらの方面に於いて次第に當事者の關心が刺戟されつゝあるに拘らず、事實上その取扱ふ問題の大部分が貧窮状態と關聯して居るが爲めに、世上一般に社會事業は救貧事業として認められて居る。救貧事業である以上その取扱には單に善良な心と資金とを要するのみである。又それと同時に社會は、「肥えた牡牛を使ふ者は肥えた男でなければならぬ」と云ふ古來の諺を逆に用ひて、貧困者を取扱ふ者は自身も貧困でなければならぬと考へて居るやうであつて、社會事業家の報酬は他の職業に比して非常に少く、有能な人間が斯業に従事することを妨げて居ると云ふのである。(Macy, op. cit., pp. 15-19.) 加ふるに貧窮状態の取扱では、何人も問題の經濟的側面にのみ注意し社會事業家もそれ以上を考慮せず被救助者もそれ以上を要求しない傾きがある。従つて社會事業家は貧困と結合して居る諸因素の探究と取扱に對して刺戟を與へられることが少いに相違ないし、科學者も社會事業を科學的研究の對象とするやう誘導されることが少いに相違ない。乍然前に屢、言及した如く、近年社會科學に於いて實際状態の分析を主要なる研究方法とする學派が現れて居る以上、現實の世界に接觸して科學研究資料の豊富なる源泉たり得べき社會事業に對して科學者は當然その關心を一層強めるに至り、その結果科學と社會事業とは益々接近し得るものと考へられる。(昭和七・九・一〇。)